

●雪崩 1995年1月

1/3 北アルプス：笠ヶ岳の中腹。時間も夕刻に近づき足を痛めた仲間もいるので雪渓の真中で幕営という事になった。雪を馴らして平らに整地しテントを張り食事の支度。1月の山の雪は乾いた雪なのになんとなく水っぽい、持参のウイスキーを呑みながら食事をするがあまり寒くない。

夜、雪が雨に変わった。1月の北アルプス、山頂まではもう少しあるとはいえこの高度でこの暖かさ、雨が降る山に来て一番いやな雨、一月の北アルプスで雨、テントの中は徐々に濡れてくる、服も濡れる、シラフも濡れる。酔いも手伝って1時間ほどはぐっすり寝た、寒い寒いと思いつつもまた寝た。寝たり起きたり雨もやんだり降ったり。シラフの中の靴下が乾き朝を迎えた。向こうの谷でドーンと雪崩の雪煙。小さい谷で何回も少雪崩。気持ちが悪いな。朝食は豚汁に餅を入れて雑煮風、舌鼓を打ちつつ皆で今後の相談。今回の山行はこれにて中止にしよう。ルートからはずれているのと、捻挫してる人がいる、頂上は次回にしようとの撤退の決定。いつものようにテントたたんで、でっかいリュックにパッキング。その時、ドカーンと腹に響く大音響。今から歩いて帰ろうとしている目の前の雪渓が右上から左下へ大雪崩。駅のプラットホームに立っていて、4本5本の列車がザザーと走り過ぎるというような感じ。雪崩を見るのは初めてだけど、なんともこれはすさまじい。あの中にいたら生きてはおれない。ぽかーん！これが雪崩か。足は震える。恐怖恐怖、これが雪崩、ほんとの雪崩、底雪崩だ。帰ろうと歩き始めるがこの雪渓を下らなければ帰れない。そこを通らなければ帰れない。なるべく端を歩き耳をそばだて、もし又雪崩れたら左のブッシュへ飛び込もうと考え、逃げ場の無いところはあせって歩き、とにかく早く危険地帯を通過しようと歩く歩く。最初にここでテントを張ろうかと言った所は跡形もない。ひとだかえもふただかえもあるでっかい雪の塊ゴロゴロ、祈りながら歩いて帰りました。ここでテントをとった場所で寝ていたら・・・と考ただけでぞっとする。もう何分か前に出発していたら・・・と思うとぞっとする。ここでテントをとったのは私で、いやと言ったのはリーダーの澤山さん。後から聞くと「あそこは、ひょっとして危ない」と見ていたそうです。

●ひぐまのいる北海道 1995年6月

初めての北海道。一番高い山、大雪山の中の旭岳。たまたま仕事の関係で旭川へ行ける事になりそれならついでに旭岳へ登ってみようと。仕事とは、とある宗教施設の大ホールの天井に雲の絵を描いてくれという依頼があった。北海道に同じような施設があり、其処を見てきてくれ、参考にしてくれという嬉しい話だった。飛行機で着きそのまま見学場所へ、パンフレットを幾つかもらい、絵を頭に焼き付け、バスに乗って山の麓の安宿に投宿した。登りたいと思い、山の装備は持ってきていた。安宿で翌日の山を思っ乾杯した。

六月の北海道：旭岳 2290M。まだまだ雪はたっぷりある。ロープウェイを使わずにスイスイ登った。頂上に着いてももう少し先へ行きたいと思ったがアイゼンが無いとちょっと不安なので断念。少し先の山は入山禁止。毒ガスが出ているらしい。地元の写真家が写真を撮っているので話しこむ。けっこう熊は居るそうだ。大阪では熊の事故は耳にしない。ロープウェイを使わなかったので人には会わなかった。唯いつもの癖でリュックにくくりつけたコップは、時々叩いた、熊よ来るなど叩いた、こちらの熊は羆、ヒグマには会いたくない。晩秋の木曾駒に登った時麓から「熊に注意」の看板がたくさん在った。もうすぐ頂上で小屋が見え始め。4時ごろ前方をでっかい黒い犬が雪渓を走り降りていった。なんでこんな所に犬がと思いつつ彼の居たところまで行くと、野球のグローブのような大きさの足跡「熊か」こんな急斜面の雪渓を走り降りるとは・・・さすが野生の熊。ヒグマはこちらの熊の数倍の大きさらしい。旭川からのバスの窓から北きつねを見た。

●富山：折立から新穂高温泉まで縦走 1995/8/24

折立ヒュッテ-黒部五郎岳-三俣蓮華岳-縦沢岳（もみさわ）-弓折岳-抜戸岳-笠が岳、これが今回の縦走路。

山のリーダー澤山さんが、日本の2600m以上の山の全制覇を目標にしている。（1999年ごろ達成したとか）同じ考えでいくと今回私もいくつかをプラスして、もう40ぐらいにはなったかな。

この2.3年夏のシーズンこの仲間で4.5日間の縦走登山。体力があればなんとかなるこんな登山が一番楽しい。

一日目は下から登るので、上りばかり、しかも何日間の食料、水、酒と荷は重い、たいていの場合は大坂からの徹夜、「しんどい、しんどい」で～す。それでも2000mを超えたあたりから樹林帯を抜けてまわりの景色は一変する。足元は石か土、ハイ松か草、夏だけ見られるお花畑。空はほんとに蒼く、雲が走って、風が飛んで、涼風が追いかける。今回曇ったのは一日だけ。何も見えずただ黙々と雨と雷を恐れて、軽い防寒具に身を包み、突然やってくるでっかい山、急な下り、白い石、黒い石。

快晴の日はそのようなことが嘘のように大展開の景色は、山、山、山。今日のはあそこまで、明日はあそこ、昨日泊まったのはあそこ、以前行ったのはあの山、その前があれ。日照りが痛い、空気冷たい、空を見、谷を見、谷川の音、風のうねり。蝶に虫、お花畑は黄、白、青、紫、ピンク。丈夫な足に感謝。大地に感謝。

●甲斐駒ヶ岳 1995年11月25日

数年たった今、印象に残っている山のひとつが南アルプス甲斐駒ヶ岳。怖かった。北アルプスの剣岳も、もう行きたくないと思うがこちらは登りの全行程がいやだった。山へ登る人が聞いたら「それなら行くな」と言いそうだけど。甲斐駒ヶ岳の頂上に着いたときには「オーオー、助かった、良かった、良かった」と祠に額ずいたもんね。今までそんなことしたことないもんね。帰りは普通の登山道だと知っているからここまで来れば大丈夫というわけでした。澤山さん河瀬さんの3人で徹夜の運転で朝に登山出発地の戸台へ到着。北沢峠方面の道は何度か来たことがある。途中丹溪山荘から七丈ヶ滝尾根道。地図にはこのコースは荒れていると書いてある。六合目石室までの怖い事。澤山さんにザイルで引っ張り上げられ、リュックが重く身体が振られて落ちそうになったり、心臓がせりあがる恐ろしさ。恐怖心がいつもたっぷりある体力を消耗し思うように身体が動かない。「撤退するか」と言われても「あの道を下るのは絶対嫌」とわがままを聞いてもらって、とにかく尾根道へ出た。ちょっとでも先へ進んで幕営ということで暮れかけた頃に尾根道の真中でテントを張る。下の方に街の明かりが点々と見える。いつものように酒と食事。あくる朝新雪の中2.3時間歩いてやっと頂上に着いた。戸台へ着いた時はもう真っ暗。宿のおばさん起こしてあやまって食事させてもらって徹夜で帰りました。

●南アルプス< 後三山：広河内岳・大籠岳・白河内岳・黒河内岳・白剥山（2237m）>1998年5月

突然、山仲間で山の師匠でもある澤山さんより電話がかかってきて「暇か」といわれ「北を予定していたが、和田さんが不参加になったので南アルプスへ行きましょう」「登山口まで車で行き、3泊テントで寝る」「安くいけるので、行きませんか」とのこと。不景気で山も自粛していたが行きたいと決めました。

◎1日目 出発は夜中。月末に個展<岡村隆久展>があるが絵のほうは大体形はついている。陶器のほうは13時間の本焼きを今日予定していたので朝10時に点火。その足で近所のスーパーマーケットへ行動食の買い出し、朝晩の食料は澤山さんが用意してくれる。行動食とは山のなかで煮炊きせずにザックから出してすぐに食べられるもので菓子パン、スナック菓子、チーズ、ソーセージなどなど。それにヘッドランプ用の電池。取って返して持参品の用意、あれやこれやの2、3時間のパッキング。すぐに夕方、ゴールデンレトリバーの小紅ちゃんの散歩、夕飯を食って陶器の窯の傍へ、950度になっているのでいよいよ還元火をいれてやる。多少の炎がでるので火の用心に窯の傍に付いてなきゃ。ただ付いてるだけで暇なので一升瓶持参の4、5時間。運転しなきゃと思いつつも、1杯が2杯3杯「ああ酔って

しまった」と思う頃に窯の火を消す時間。戸締まりをして家に帰るとすぐに澤山さんが来てくれ大阪を出発。

◎2日目 朝9時。ここは静岡県の畑薙第一ダムの売店のベンチ。昨夜は、澤山さんがずっと運転してくれ後部座席でうつらうつら。朝6時ごろに到着、暖かいものを着てベンチでゴロ寝、相当寒い。南アルプスは東海パルプ所有地で、いくつかの山小屋も経営してる、その送迎バスで榎島経由二軒小屋へ2時間たらず。今回の目的地は、広河内岳(2895m) 大籠岳(2767m) 白河内岳(2813m) 黒河内岳(笹山)(2717m) 白剥山(2237m) という縦走コース。なんでこんな聞いたことも無い山かということ、我らが澤山さん日本国中に在る2600m以上の山を全踏破<国土地理院25000分の1に掲載>が目標で、そんな山が125あり今回の山2つで、富士山を残すのみということ。二軒小屋を出て3日間ひとつこひとりにも会わないという知られていない山に来たわけである。出発まえの窯の傍のTVの天気予報で中国大陸にデッカイ雨雲が大写しされ、これが日本列島にやっきて2日、3日は海山とも大荒れで注意してくださいと言っていた。朝からいつ降るかと思いつつ久し振りの山行で昨夜はまともに寝て無い、林道歩きといえどもしんどい。1時間歩いて少し休むのを1ピッチとして5ピッチも歩いたところで川を渡る橋がない。小川は大井川の源流だ、渡る場所を探すが膝上ぐらいしか水は無いがそれでも勢いはすごい。前方は巻道(まわり道)するには崖がすごすぎる後方は濁流、地図では徒渉になっている。丸太の橋が流されたのか、どこかにロープが張ってないか、それにしても流れが速すぎるし靴を濡らすと明日が辛い。思案の末雨も降ってきたので何分か前に在った廃屋で一夜の宿をと引き返す。

◎3日目 朝9時。うどんと和そばの朝食。昨夜の宿は東海パルプの飯場小屋の廃屋。まだ屋根のある部分にシートを敷いて夕飯の用意。澤山さんと私の場合、私は水汲み係り、澤山さんは鍋<コンロ>奉行。その箸さばきコンロさばきは繊細で絶妙である。牛井と、中華井と、ふかひれスープ。持参の焼酎をのんでばたんきゅうで19時就寝。一応屋根はあるのでテントなしのシラフのみ。何度か目覚めたが雨模様。朝は晴れ間も見えたがどんどん降り方が激しくなり、昼ごろにはドシャ降り。もう1日の停滞か。山での停滞はこれで2度目。2年前の南アルプス荒川小屋、台風ですごい風雨、幕営の連中も小屋に退散してきてひどい1日だった。昨日の徒渉不可の川、手前の澤が激流で渡れない、というより流れの位置が変わっていた。学生時代地理で習った平野や中州はこんなふうにして出きるのかと目のあたり。本流は土石流の感。夕方近くなって嬉しいことに晴れてきた。ちと散策ということで出発、水筒と菓子類持参。このへんは10年ぐらい前までは大々的に伐採の仕事をしていたようでそんな男たちの夢の後、やたらと酒、ビールの瓶のごみが目立つ。廃屋郡が10棟程在り山の中のわりには飯場の小屋もしっかりしている、山の麓とプレハブ建てのせいかな。明日の帰り道の澤がゴーゴーとこれまた土石流で丸太の橋が流されている。明朝までには水量が減りますように、でないに進退きわまるじゃないですか。5時すぎ2日目の小屋に戻り取ってきた露の羹、たらのめを湯がいて食べる。焼酎を呑みながらいわしのオイルサーデン、そこにも露の羹をいれる、うまい。その夜は昨夜寝すぎたせいかな眠く無い。どうも怖がりの私、真っ暗闇の中、空恐ろしい物の怪が妄想の世界に広がって、ひとりでは絶対におれんなと後になって苦笑。

◎4日目 朝7時出発前のひととき。食料も酒も減ってザックは軽い。天気も快晴を思わせる。朝食はカレーうどんとふかひれスープ、紅茶、パン、水筒に茶を入れる。10分ほどで昨日見た橋の流れた澤、うまいことに水量は減っている。膝下までの水ひっくり返されることはあるまい。ビニール袋を出して仮雨靴、膝下と言っても速い流れ。慎重に一步步、さっさとは渡れない。靴が濡れなきやいいかと渡り終える、濡なし。しばらく歩くと、奈良田越の標識。見上げると直登にちかい。ザックをおいて、水筒、パン、菓子を、ポケット入れ登り始めたが、目印もなくやばいなと思いつつも30分進む。澤近くのガレ場、道は無くなり危険で撤退、落ちれば崖下で一貫の終わり、下りは登るよりやばい、くわばらくわばら。下においてフルーツゼリーで一息。暑いときはこれに限るが難点は重い。もうすこし下ると林道から上へ行けるということで出発。水場で水を呑んでいるともしかの頭発見、頭蓋骨と角、歯、毛がすこしついている、持って帰るぞと袋に包んでザックに縛る。もしか君今もアトリエのベランダで乾燥している。山に入って3日目。体も慣れて快調。奈良田越まで1時間、白剥山まで30分、このルートでくれば目的の2山を縦走出来たかも、それとも3日の雨でやはりどこかで停滞していたか。兎に角山の中での雨風はいやなもの、その点雪はいいんだが。

マイナーな山でも尾根道はしっかりしている。2年前の策ヶ岳の時も下の澤あたりで道を間違えたが尾根に上がるとすいすい歩けた。今回は残念だけど、人に知られていない山は澤山さんがいないと登れないだから感謝感謝。最終日は二軒小屋を、予約してある。3時過ぎにつけばいい。たらふく夕飯を食って散策。澤山さんは18才の時の35年程前に来たそうだが今は山小屋というより山のホテル。値段も13000円プラス税。山から帰って泊まるにはもったいない。横に登山者のための素泊まり小屋がある。4000円だそうだ。ダムからここまでのバス代が、無料なのは、ありがたい。

◎5日目 朝7時。いよいよ今日は、帰る日。二軒小屋の傍に大井川が流れている。そこから千枚岳、荒川岳へ行ける登山口がある。その入り口、逆巻く水の上の簡単な橋を渡った所から100m程上から大分崩れ、登山口にでかい石がごろごろしている。最近の土砂崩れだそうでこの辺の山は崩れている所が多い、その水量が昨日に比べて減っている。昨日は、水が小山程も盛り上がり水煙が上がっていたが、今は滔々と流れている。ここは標高2000mぐらい。いろんな種類の木があってそれぞれがそれぞれの新緑の色を競い合っていて、遠くの山はもこもこと近くの樹は葉の一枚一枚が呼吸をしている。向こうの山に日が射し込んで川に虹が出、今日こそは顔が焼けそうな快晴。そんな天気なのにもう帰らなければならないなんて、残念なことだ。バスでダムまで乗せてもらっていいよ東名高速まで長くねくね道。南はこれが長い。帰り着いたのは、9時頃。琵琶湖のあたりからの高速道路の渋滞、毎度のことながら長い。いつもの事だが、私の山と都会との交差点は、行きは家を出る時。帰りは、登山口を出たとたん。今回の山なら、二軒小屋に着いた時で山は終わった。山から都会へと降りてきた時、いい時間が持てた、いい体験ができた、と満足する。あのしんどい、きつい、重い、なんてみんなふっとんでしまう。高所恐怖の『怖い!』だけは、何時になっても治らないけど。

●五竜、唐松岳 2000/8月/10

今回の山、阪口いつ子さんから電話があって「あの岡村さんですか?」「やあ、元気ですか岡村です。皆さん元気ですか」一呼吸あって「阪口がなくなって10年になります・・・子供を連れて彼が好きだった五竜、唐松へ行きたいのですが同行していただけますか」彼は私の誕生日に亡くなった。私より5歳下で39歳だった。もう10年経ったのか・・・38歳のころ阪口さんに誘われて比良山へ行ったのが私の山の最初。朝7時に京阪三条駅前待ち合わせてバスで坊村へ。武奈ヶ岳を登って湖西線比良駅まで歩いた。ハイキングしか知らない身体は筋肉痛が二日ほど続いた。2回3回比良へ行った後の5月の連休前に「信州の山へ行きますか」と誘われた。二十歳の頃新宿駅で累々と並んだリュックサックの山やさんを見てきた。「俺あんな所へ行ける?」とヤッケ、靴、アイゼンを買って、リュック、スパッツ、シラフ、手袋は彼の奥さんのを借りることにして、今回の山もこの列車に乗ったんだが、13年前の5月のゴールデンウィークの夜行列車に乗った。

リュックのパッキングなんて知らない私のリュックはたいして入ってないのに大きく膨らんでいた。彼は私のリュックを詰めなおしてくれたが、20kgの重さは肩に食い込んだ。川で1.5Lの水を追加。2462mの火打ち山。今からおもうと高い山ではないがしんどかった。「ひ～ひ～ は～は～」ほとんどの人に追い抜かれて喘ぎながら雪の中を登ったのが最初のアルプス登山。阪口さん、飴と鞭でなんとかかてっぺんまで連れて行ってしてくれた。もうすぐと言った頃から吹雪き出してやっと小屋が見え「小屋の中に入りたくない」と彼を見るとスコップを取り出して雪を掘り出した。あの時は何をすると驚いた。今なら、「さあテントを張って今夜の宿を作って晚餐と宴会の始まり。一番楽しい時間の始まり」なのだが彼の雪を掘る姿を見て「小屋が横に在るのになんでこんな雪の上に寝るの?」と撫然としていたのは昨日のよう。テントが出来上がって「さあ入ってください」と笑顔の阪口さん。コールマンのストーブで煮炊きして持参のウイスキーやらブランデーで乾杯。そのテントに2泊。快晴の中でハイキング、真っ黒になって帰った。帰りの列車に乗ったとたん「あそこが〇〇岳、又来たいな」と彼が言う。「しばらくは来たくないな」と俺おもう。でも2週間後に又彼と白馬大池へ。それからいくつかの信州の山、比良山へも何度か行った。

彼が亡くなる半年前の5月表銀座。吹雪の常念岳。雷と雪の中の道捜し、チラと大天井小屋が見えたときは「おお着い

たか」と余裕があった。でも明るく朝カリカリの雪渓で俺2、3m 滑落。ほんとに、ほんとに、肝が冷えた、よく止まってくれたこと。

8/9 大阪駅 21:42 長野行き急行ちくま。夕方からいっぱい呑みだしていたので京都あたりからうつらうつら。4:00 塩尻。5:30 大糸線神城駅。10年振りに会う奥さんと3人の子供達。7:00にペンション前でということでゆっくり向かった。泣き虫のベビー達は中学生高校生に成長していた。ケーブル、リフトを乗り継いで9:00歩き始める。子供達はよくがんばった。暑いきつい。10分ぐらいずつ登っては休憩の繰り返し。「これでは無理かな」2時間ほど経った所で会議。「中遠見に在る阪口さんのプレートまで行って阪口家は下山。俺ひとり登山」と決め昼頃目的地。俺この山初めて、何処に何があるか分からなかったけど、「君達のおとうさんからもらったこのテントで、おじさんお酒を呑みながら、君達にお父さんの話したかったんだよ。又会おうね」

12:30 ひとりで出発。1時間ほど歩くと上のほうに小屋が見える。おおすぐだと思ったがこれがなかなか。だんだんガスが出てきて、真夏の暑さから涼しい風が吹き所々に根雪が見られる。紙の毛に今までの汗に変わって露が着くようになってきた。地図では雪渓が在るとなっているがなかなか見えない。毎度の事登山の第一日は寝不足、荷の重さ、長い登りの三重苦。小屋に着いたのは3:30。贅沢ビール600円、テント場代500円。天水3L:300円。ビールで阪口さん家族と乾杯。ラーメンを煮て、出戸さんからいただいた焼酎を呑むと朝までも寝てしまった。もっとも風がきつく何度も目覚めたが。

8/11 朝食はラーメンとご飯で腹いっぱい。行動のお茶を作って6:30五竜山頂に向かってピストン出発。荷はお茶とお菓子。霧の晴れない山頂へ足は快適。夏の季節若い人が多い。普段は中高年が多いがヤングが居ると山も楽しい。山頂は霧だが少し晴れると剣岳が見える。テントに帰り唐松に向かうためにテントをたたんでパッキング。山を歩くとよく水を飲む。湧き水、川の水、小屋の天水、雪を溶かした水、一番旨いのはお茶。まずいのは天水、さて出発。1.5Lのお茶を持って尾根道悠々散歩。なかなかいい感じ、緩やかに下って巻いている。晴れてきて朝登った五竜が見え隠れ、小屋はと捜すがそれは見えない。さすが今の季節花がいっぱい咲いている。山の花は下界の花に比べて小さく可憐。色は白、ピンク、黄、紫これらの小さい花が風景の中に点在し、森林限界を超えた高いところは、目を遮る物がなく勇壮な桃源郷、うっとりとするが私には「画にも描けない美しさ」である。「う～んもうちょっと旨いもの仕入れておくんだ」歩くうちに、尾根道の底。ここからは登りだ。唐松と思われる辺りに左右の道が見える。右は明日下る八方尾根。左は祖母谷温泉(ばばだに)への道。この祖母谷温泉、8年前の92年山の師匠の澤山さん、河瀬さんの3人で猿倉から白馬に登り、そこから祖母谷温泉に下って500円で露天風呂の温泉に浸かった。地図で見ると白馬からより唐松から行くほうが近そうだが、一人でいった事のない道はやめておこう。

唐松への登りがきつくなって、ひ～ひ～は～は～。ガレ場岩場が多くなって鎖も頻繁に出てくる。荷が軽いならヒョイヒョイ歩ける岩場も20Kgを超えるリュックが背に在ると身体の自由は利かないし弱点の高所恐怖症。でもこの岩場はたいしたところもなく目の前に忽然とでっかい赤い屋根。小屋の付近は人がいっぱい。明日からお盆だ。天気がややこしくなってきたヤッケを出してリュックにカバーをかけて小屋の側において唐松岳頂上へ。行って帰って50分。テント場代500円で申し込みテント場へ。水はその側に雪渓があるという。我がテント阪口さんからいただいた物、よそのテントはほとんどがゴア製でフライも張っている。こちらは大分痛んではいるが昨日の強風も大丈夫だったしこれでいいのだ。雪渓の水はどんどん流れてくる。芋、ニンジン、タマネギを刻んで煮て塩コショウ、コンソメを入れて少し煮る、なかなか旨い。まだ2時過ぎだが昨日の出戸焼酎を呑みだす。雨が降ってきてテントの中に入り、あ～もう焼酎が無いなとシラフの中で目覚めたのは夕方6時。薄暗い中2.3時間ゴロゴロしているとなんだか外が明るい。小窓から見ると上の方が2割ほど欠けたでっかい月が煌々と顔を出している。晴れているなと入り口を空けたら満天の星。顔を出して小1時間、流れ星が流れたらあれをいおうと待機するも今日はだめ。

8/12 5:30起床。湯を沸かして行動のお茶を作って水筒に詰め、ご飯を温め昨夜の残りの芋を茹でその中にラーメン。人が聞けば昔の犬飯かといわれそうだがでも旨い。帰るためにパッキング。ベテランはテントの中で、中にあるものからリュックに詰めて靴を履いてテントの外に出てテントを畳んでリュックの上部に詰め、はい出来上がり。いつも澤山さんに言われるのだが、俺の場合は靴を履いてまず外に出て敷物、テント、シラフをリュックの底に詰めてそれ

から小物のいくつかを入れ「はい終り」となる。バナナはコフェルの中、パンはリュックのふたについでる袋の中、夏は何もかもが腐るのでこれも気をつけないと。食料も水類も燃料も無くなって荷は軽い。菓子パン2個、果物の菓子1個、下まで行けばなんとかなる。6:20 出発。八方尾根は登山道がきれいに整備され下界の遊歩道に近い。これはちょっとやり過ぎと言いたいが山の中もこんな風に整備したい役人がいるのだろう。8時過ぎリフトが動き出して人人人。リフトまで来て乗る気もせんので歩く。この辺りはスキーマッカ。リフトだらけ。スケッチを何枚か描いてふらふら帰る。阪口さんと白馬大池から歩いて帰った景色とオーバーラップ。スキーと牧場とリフトが白馬近辺の景色。ひとりでの山はさびしいけど気ままわがままこれもまたいいじゃない。牧場が終わった辺りから下のほうに白馬のペンションが見え出してきていよいよ都会になってきた。そのちょっと手前の谷で裸になって身体を拭いて新しいTシャツに着替え小1時間歩く。列車に乗る手前で弁当とビールのロングカン2本買ってホームのベンチで昼飯。家へ帰ったのは夜。

●前半八ヶ岳：後半上高地 2001年2月

松本発梅田行きのバスの中

大阪を出発したのは9日の夜急行ちくま

5日間も山で遊んだ

前半八ヶ岳 後半上高地

上高地の入り口に釜トンネルがある

秋から5月の連休まで車両は通行止め 積雪のため

上高地の向こうには焼、穂高、槍、蝶、常念

北アルプスの山 いっぱい

釜トンネル今までに何度か歩いて通った

凍っている 真っ暗 工事の大型車 怖い怖い

上高地の帰途 山下さん 坂巻温泉に入ろうという

トンネルを出た売店 山下さん コーヒー飲もうという

山下さんは もう 都会人になっている

谷川の対岸 あばら家 ト伝の湯

塚原ト伝(1571没)も入った 秘湯

山下さん あれ 入りませんか

山下さん 昔入った時には 扉も無かった と

零下十数度の山 何枚もの服を脱ぐ

ぬるぬる じめじめ 硫黄のにおい

寒い寒い 洞窟の階段を下りる 岩石を繰りぬいた湯船

湯のなか ほんとにほんとに きもちいい

3日前 八ヶ岳 ひとり寝たテント寒い寒い

釜トンネル ツララと雪の世界

氷を踏む すってんころりん ひっくりかえる

人が転ぶと 大丈夫か と びっくりする

自分が転ぶと おかしくて 苦笑

コーヒー 温泉 回転すし 山下さん おごってくれた